



## 説林

### 歐米の家庭教育及幼稚園

#### 保育視察談

下田次郎

私は只今中村さんから御紹介になりました下田  
 といふ者でござります、今日はフレブル會で何か  
 と云ふ話と云ふ御話がござりましたが、私は幼稚園の  
 事に就いては極めて門外漢でござりまして、向う  
 で學校を見る内にも幼稚園の事は極めて粗漏で  
 あつたと言つて宜からうと思ひますから、諸君に

幼稚園に就いて御参考になることを言ふことは出  
 來ぬと信じて居ります、家庭を見るのも婦人の方  
 が宜いので、男子は到底這入り込めぬ所もあり、  
 又彼方此方を歩くので一通りを能く見るとも出來  
 ず、それで外國の家庭の模様も極めて不充分で  
 ござります、さうすると此方に出て何も御話をする  
 とはないのでござりますが、其他赤子を養ふて居  
 る所とか、赤子でなくても月足らずに生れた者を  
 卵を孵化する様に人間にする事とか、さういふ事  
 を交せて填め合せしやうと思ふのであります  
 先づ家庭の方から申しますと、家庭と云ふは御  
 承知の通り一の家族があつてその各員が相互に活  
 動する内輪の舞臺或は有様であります、其家族  
 が成立たぬと國も成立たぬ譯でござります、社會  
 が成立つのは家族が本である、これまでは社會の

本は一個人であると云ふ様に申して居りましたけれども、今日は其説は變つて社會が成立つは一個人にあらざして社會と似寄りのあつて最も小さいものは家族である、家族と云ふものは社會の本であるので、個人は社會に似た所はないと申して居ります、ウイルマンの如きもオーギュスト、コントの如きも家族は社會の原子体であると申して居ります、家族には何處も重きを置いて居るので、向うでも羅馬時代は別して家族は重きを爲して居つたのでありまして、其時代は家族と云ふことは唯々家の血が續いて居る者ばかりでなくして、當時の奴隷も這入つて居てそれが一家族になつて居る、故に分業も出來て居て一の小さい社會になつて居つたものであります、それで此頃申す家族と羅馬時代の家族は意味が少し差つて居る、さうして西洋

では家族の關係は法律其他の事に於て議論もあつて、家族の間でも權利義務と云ふことが出來て居るが、日本でも民法が出來て種々の事が規定されたが東洋全體の家族と西洋の家族は少し趣きが差つて居ると思ふ、向うは家族の間にも權利義務の思想があつて、一つ罷り違へば法律沙汰となるのである、つまり羅馬法以來の精神が傳はつて居るが、日本の家庭は人間は別で同體である、到底離るゝことの出來ぬものと云ふ考へを有つて居ります、西洋では一の家族が亡ぶると云ふことは、日本或は支那で思ふて居る様な重大なことではない、西洋では大變に金を溜めても後繼がなくして誰に渡すか判らぬと死ぬることは珍らしくないが、東洋は家族を斷絶させるは非常の事であつて、種々の方法を以て家を大事にする傾きがある、それ

であるから一の家を寄つてたかつて守る考へは西洋にもあるが、東洋ほど鞏固でないと思へる、それで東洋では家族相互の者は互に人は異つて居ても第二の我と云ふ考へがあるから、自然呼び名に於ても家族相互の者を他人に對しては呼び棄てにすると云ふは、自分の同じ片割れであるからそれを尊敬するは自らを尊敬すると云ふ考へであるかと思ふが、西洋では其處に區別があつて同じ家族であるものでも他人に對して言ふ時は何君と云ふ様な尊稱を附けて居る譯であります、それから夫婦の關係に致しても西洋では少し罷り違ふと直ぐ訴訟があつて種々の争ひがあるが、日本では民法が出来ても夫婦の争ひは西洋の如く多くない譯であります、手足の爪を放しても皆夫への爲じや物」といふ文句がよく其の觀念を代表して居ます大体

の觀念と云ふものが一方では家族全体を我を同一に見ると、他方では家族全体を別々に考へて見ると云ふ區別があると思ふ、従つて家庭に於ける感化が餘程異つて來ると思ふ、父は父、子は子と云ふ區別が附く、子は大きくなれば親の世話をするは勿論であるが、日本の者の孝行と西洋の者の孝行とは少し意味が差ふと思ふ、親子の愛情を日本では子は親と同一に思ふて居て西洋人が來ても親子の關係に感ずるが、向うはそれが薄いと思ふ、それで西洋と日本とで見ると嚴格さが差ふ、西洋では日本より随分厳しい事をやる、日本の弊を言へば子の愛に溺れて子を自儘に育てると云ふ所があると思ふ、これが家族と云ふ事に就いて東洋と西洋の一般の區別であると思ふ、

それから先づ獨逸の家庭に就いて少し御話を致

します、一体獨逸の國は萬事餘程軍隊的警察的であるが、學校にも警察が這入る、補習學校の如きは理由がなくして休んだ者は警察に拘引するとか五十錢の罰金と云ふ様に警察で取締つて居る、學校に於ても教員の命令は生徒はそれを畏みて聞いて居る、家の内でも長老と年少の區別があつて、飯を食べる時でも父や母は御馳走を食べて居る子にマヅイ物を食はせても不服は言はぬ、夜は子供は八時に寝る寝ねば制裁があると云ふ工合、それから獨逸は子が多い佛蘭西の様に一家二人以上の子が無いと云ふことはない、五人以上ある家は珍くない、家の内に於ての秩序はさうであるが學校に於ても極めて秩序的になつて居る、それで物を言ふにも一二二と云ふ様に番號を附けて言ふ、學校で教へらるる通り家の内でも子供が第一何第

二何と云ふ様に番號を附けて言ふ事があるのである、一体獨逸の女と云ふものは世話女房的になつて居る家の事を働か編物が上手で外の家へ行つても相互に編物をして話す、所に依れば公園に十河人彼方此方に机を取巻いて編物をしながら話して居る有様である、向うの女の兒は夏は此處(腕を云ふ)から此處は丸出し、足も膝から丸出しで、男の子の方は却てそうしない、女の子は衣肝に至り袖腕に至ると云ふ風である、竹馬にも乗る、又音楽は小さい時から慣れて居る、往來でも舞踏の様な事をやるを彼方此方で見受けました、それから幼稚園の方であります、私が見たはライプチヒに一ツありましたが、幼稚園は二三日泊つて居れば宜いを通り過ぎに見るのですから、一週間にドウいふことをやると云ふことは見ませ

ぬ、其處で見たい手工の展覽會があつたので、重  
 もに此方でやります細い幅の種々の紙で四角に種  
 々の形に編む、それから向うの御伽話、土臺を作  
 つて其上へ人形や木や家の模様を据へて御伽語の  
 實況をこしらへて居つた、雪白姫といふがあつて  
 七人の小人が居ると云ふ所、山の様な物を造つて  
 やつて居る、又景色を作つて彼方此方に置いて居  
 る、機械体操の雛形をすへた運動場も置いてある  
 それから土で拵へた盆、壺、徳利板に見易き彫物  
 をしたの、糸で繪の輪廓を繞ひ附けたのもありま  
 した、又紙で拵へた函の類、圖案の様な繪なども  
 ありました、

それから伯林に大なる幼稚園があります、それ  
 は伯林國民教育會と云ふのかあつて、獨逸の皇后  
 陛下の保護を受けベスタロッテ、フレーベルの家と

いふを持つて居る、其處には幼兒に限らず乳呑子  
 を預る所もあり、幼稚園がある幼稚園と小學校と  
 の間に中間の學校もあります、幼稚園は二歳半か  
 ら五歳、中間の學校は五歳半から六歳、小學校に  
 なると六歳から八歳の子供が行く、其他六歳から  
 十四歳までの男の子女の子が、學校から歸つても  
 親が仕事で居處のない者が來て見易き手工など  
 して居る處もあります、其處では午飯を日本の五  
 錢で食べらるゝ様になつて居ります、それから幼  
 稚園の保姆や教員養成する所もあり、又別に冬は  
 教育の講習會を聞いて居る、以上は第一の家でや  
 つて居る、第二の家は料理それと家事の學校、料  
 理の方でも唯々家の内でする料理と高等の料理の  
 二通りあつて一方は念が入つて居ります、それか  
 ら上流社會の娘が料理を習ひ家事を習ふ所と、

學校の子供の習ふ所もあり、また家政や、細君の補助の練習科と云ふものがあつて家でする事を習ふ、家事教員養成科もある、又下女の心得を教ふる處もある、大体それだけをやつて出て大變大なるものであります、これは其家の繪ハガキで砂を以て種々の遊びをして居るのであります、此(寫眞を示す)は幼児か輪なりに繋かりて居るのであります、此れ(寫眞を示す)は子供が食事をして居るのであります、此處は火曜の十時から一時は公開で其間に行けば案内して見せます、外國人が多く參るのであります、遊戯などは別に異つたものは見ぬでありました、生徒は貧富種々あります其の詳しい事は此の年報があります、西洋は高等女學校でも小學校でも年報を配りますからそれを集めれば皆な判ります、日本でも年報を出せばお

互に參考にならうと思ひます、ライズチヒには小兒預所があつて、お母さんが畫工場に出て誰も家に守りする者がないと云ふのが預けに來る、夕方仕事で濟んで伴れに來る、これは(寫眞を示す)一例で澤山子供が居ります、其處で幼稚園のやり方で四十人ばかりの小さい小兒が居りまして、保姆は二人、勞働者でありますから着物などは穢いのであります、遊戯は獵師が犬をつれて兎を追ふことをやりて居りました、又小包郵便配達、配達夫は軍人の様な服を着て一種の喇叭を吹いて馬車に乗つて居るそれを真似して居りました、唱歌をして運動するが通例であります、其間に徒手体操もやります、獨逸は幼稚園の芽を出した本國であるから幼稚園が盛んであると思はれるか實は反對で餘り繁盛しませぬ、幼稚園に反對の意見を持って居る

人もあります、

(以下次號)

讀書につきて (承前)

牧羊

前號に於ては、書籍を讀むことの利益を列舉して見たが、本號では更に進んで讀書の注意といふことに書き及ばさうと考へる。

現今の社會は丸で書籍の社會である、新刊書の廣告に顯はるゝもの日々數へ盡す能はず。實に現今の世界は書籍を以て充滿して居る。然し詳に觀察する時は更に一讀の價値だも有せざる悪書籍も亦數へ盡されぬ程あることは事實である。次に又極めて一時的の出版物がある。其時には極めて有益であつたかも知れないが、其年なり月なり

を經過し去つて、或は又其出來事が消滅してからは、一向價値を持たない書籍である。或は又特殊専門の書籍がある。即ち特殊専門の學術を研究せんか爲に、又は或る特別の目的を有する人には極めて必要であるが、夫れ以外の人が見ては、讀んで興味もなければ利益を得る所もない。

故に書籍に依つて、自家の智見を進めんと欲する人は徐ろに汗牛充棟ならぬ書籍の中で、其最も適當せるものを選択することが、頗る必要である。書籍の選擇、これ實に讀書家の力むべき第一要件である。

次に或書物を得て、さて之を讀下しようといふ時に當つて、先づ其書籍を概觀することが必要である。即ち一々精讀するに先だつて、先づ著者の緒言とが序文とか若くは目錄とかを一通りスラ